
日本NIE学会会報 第8号

日本NIE学会事務局
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2
国立大学法人横浜国立大学教育人間科学部
重松克也 研究室内
TEL/FAX 045-339-3433
E-mail ka-shige@ynu.ac.jp

NIE学会第四回大会が広島で開催されました

去る11月17日(土)、18日(日)の両日にわたって、日本NIE学会第4回大会を、広島大学大学院教育学研究科・教育学部(東広島キャンパス)において開催いたしました。全国各地からNIEの実践や研究に関心をよせる教育関係者、大学関係者、報道関係者など約160名の参加者がありました。

第1日目は、まず正午より理事会が行われ、役員改選、会計、事業計画、学会の運営方針などについて話し合われました。その後13時より、全体会場で、「優れたNIE実践とはー理論化のためのフレームづくりー」をテーマにシンポジウムが行われました。柳澤伸司先生(立命館大学)のコーディネートで4名のシンポジストからホットな提案がありました。休憩の後、「日本型NIEの理論化をめざして(2)ー実践家の事例分析を通してー」をテーマにした課題研究Ⅰが行われ、4本の発表と意見交流がなされました。17時からは年次総会が行われ、役員改選、会計、事業計画、学会の運営方針などについて了承され、1日目の日程を終了しました。なお、18時からはキャンパス内で懇親会が行われ、それぞれの研究状況や日頃の実践ほか様々な話題に花が咲きました。

第2日目は、まず、4会場にて合計11本の自由研究発表が行われました。最新の研究成果が発表され、それに対する活発な討議が展開されました。続いて、全体会場で、「NIEの教育的効果に関する実験・実証的研究ーリテラシーを育成するNIE授業の開発を通してー」をテーマに課題研究Ⅱが行われ、3本の発表と意見交流がなされました。当日広島大学周辺で開催された中国中学駅伝による交通規制の関係で、課題研究Ⅱを予定より早めに開始するとともに終了時刻を10分早め、12時にはすべての日程を終えました。

本大会では、新しい試みとして大会テーマを掲げました。「優れたNIE実践の理論化をめざして」です。シンポジウムや課題研究ほか大会の全体を通じて、大会テーマを意識したご発表や建設的な意見交換が行われたことにより、多くの成果を挙げる事ができたのではないかと思います。十分な運営ではありませんでしたが、ご参会の皆様のご協力によりなんとか無事に大会を終了することができました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

それでは、来年度開催地である福岡教育大学にバトンタッチをしたいと思います。

(日本NIE学会第4回大会実行委員会事務局 広島大学 朝倉淳)

各会場からの報告

◎ シンポジウム「優れたNIE実践とは～理論化のためのフレームづくり～」

シンポジウムでは、新聞を活用した授業実践の経験を踏まえて実践者の立場から「優れた実践」とはいかなるものか、また新聞界からみた実践の評価など、それぞれの学習段階（中高大）に応じたNIE実践を検証しつつ、「優れたNIE実践」とはどのようなものかを検討し、理論化のためのフレームづくりの手がかりをつかむことを目指した。

まず、中学校の実践者として中西一彦氏は、新聞を表現の場とする投書を利用した実践から、実際に生徒が書いたものが社会でどんな評価を受けるのかを体験させた取り組みを紹介しつつ、NIEを誰もが行えるようにするためには現場にある「手間がかかる」「手引書がない」などの声をどうするかが課題であり、日本のNIEはまだ入門期であると指摘した。

次に高校の実践で種谷克彦氏が自身の経験から、現在の国語教育において教科書を絶対視したり、指導者の読み方に従わざるをえない雰囲気になったりするうちに、生徒が学習者としての主体性を失ってしまうのではないかといった問題意識から、新聞記事の比較読みは有効だったことを紹介した。生徒の能力を育てる上で新聞を活用する必然性が説明できればNIEは広がっていくと強調した。

また、将来教壇に立つ学生を教える大学での試みとして平石隆敏氏は、付属中での授業に学生を参加させ、授業で新聞を使うと教室の雰囲気が変わることを体験させて優れた実践に実際に触れさせることの重要性を紹介した。一方で、NIEが「新聞好きな子どもを育てる」などというややもすると新聞を絶対視する部分があることへの言説について、新聞への批判的な視線も必要ではないかと指摘し、新聞の社会的な機能について議論する必要性を提起した。

最後に、これまで新聞社でNIE担当の編集委員として数多くNIEの実践を取材してきた福田徹氏は、優れた実践には記事を適切に見つけ選択できる能力が不可欠ではないかと問題提起し、新聞に聞する一定レベルの知識が教師は必要となるが、実際に教育現場ではそういうことを知る機会は案外少ないことの実態が示された。

各報告を通して、教育現場でNIEの授業を可能にする「教科書」や「手引き」が必要な時期に来ているという観点と、NIEを実践する教師の側にも新聞についての必要な知識が求められるのではないかとした課題を確認し終了した。（コーディネータ 柳澤伸司）

◎ 課題研究I「日本型NIEの理論化をめざして（2）」

—実践家の事例分析を通して—

本課題研究Iは、研究委員会の企画として、昨年度の新聞社におけるNIE実践の分析に引き続いて、本年度は、「日本型NIEの理論化をめざして（2）」—実践家の事例分析を通して—をテーマに行われた。具体的な実践家の事例としては、臼井淑子氏（横須賀市立鴨居小学校教諭）と植田恭子氏（大阪市立昭和中学校教諭）の実践を取り上げた。

当日の課題研究では、最初に臼井氏が、「小学校国語科においてNIEで育てるリテラシー」と題して、リテラシーを育成する小学校国語科におけるNIE実践の現時点で到達している基本的な考え方とそれに基づく「比べ読み」を取り入れた検証実験授業の成果を報告された。それを受けて、山元隆春氏（広島大学）は、「臼井淑子氏の実践の分析をもとに」と題して、リテラシー形成の視点からの臼井実践の特色と意義について報告された。

次に植田氏は、「実践の振り返りからみえてきたもの」と題して、中学校における国語学習を中心に自己の実践の歩みを自己形成史の形式で報告された。高木まさき氏（横浜国

立大学)は、それを受けて「わたしを編集するNIE―植田恭子氏のNIE実践―」と題して、カリキュラム、学力、学習材という観点から植田実践の全体像の解明を試みられた。フロアーからは、「教師の自分探しとNIE実践の歩みとの関連」や「NIEとクリティカル・シンキングの関係」について深めてほしい、「国語科以外の他教科や総合的な学習の優れた実践の理論化もお願いしたい」といった質問・意見が出された。最後に、提案者からはこれからの優れたNIE実践開発の方向性についての提案がなされた。

本課題研究を日本型NIEの理論化という観点からその意義をまとめると、次の3点を指摘することができる。第1は、臼井・植田両氏ともに、教師としての歩みの中で授業の限界を克服したいという動機からNIEに出会い、夢中になって学習開発を行い、その中から実践をより質的に向上させたいとの新たな動機から理論化という視点で自己の実践を振り返られているように、NIE研究においては、その事実である実践の分析を通して理論化を図っていくことの必要性が明確になってきたことである。第2は、臼井・植田両実践に共通しているように、メディアリテラシーを中心とした目標としての学力、発達段階に応じたカリキュラム、学習材としての新聞記事、学習活動などを視点としての理論化が目指されていることである。そして第3は、実践の理論化と理論の実践化という、実践と理論をつなぐNIE固有の一つの研究方法論を模索することができたことである。

(コーディネータ 小原友行)

◎ 課題研究Ⅱ「NIEの教育的効果に関する実験・実証的研究

―リテラシーを育成するNIE授業の開発を通して―

数年前にNIE実践者がよく使っていたフレーズに「新聞は薬である」というものがあつた。子供や生徒、広い意味で学校が今直面している諸課題を解決するために、NIE実践が効果的であるという意味であつたように記憶している。今回の課題研究2はこの言葉を基本に据えて、3名の実践者が「各自の所属校で抱える諸課題(症状)」に「NIEで育てることができるリテラシー(薬の効能)」を明らかにし、「具体的実践方法(薬の正しい用法)」を開発することを課題研究とした。3名の実践者からは小・中・高それぞれの発達段階、また学校の置かれている現状をふまえた報告がなされた。

下黒瀬小学校(広島県)の松岡靖教諭は①情報を鵜呑みにする児童の実態を解決するために、②NIEによってメディアリテラシーを育成することを目標とし、③戦前の新聞を用い、メディアの特性の理解をはかり、その後意見交換を行うことでメディアと社会の関係を捉えることが可能となった実践を報告した。

櫃石中学校(香川県)の藤川由香教諭は①小規模へき地校という環境に起因するであろう生徒の社会性・自主性にかかる現状打開のため、②NIEによって実践的学力の育成リテラシーを育成することを目標とし、③スクラップ活動(音読活動・レーダーチャートによる自己評価)の継続を進めた内容を報告した。

浜田高等学校(島根県)の河井俊彦教諭は①社会的事象への生徒の無関心を解決するために、②NIEによってメディアリテラシーを育成することを目標とし、③記者派遣授業の実践から得た副次的効果を報告した。

課題研究2の時間そのものが諸般の事情で多少制限されたこともあり、各実践者の報告が実践発表的になってしまった点があつたが、会場からその報告内容に対して、準備の緻密さやその実践内容のレベルの高さに驚きにも似た賞賛がなされた。共同研究ではなく「現場の教師が孤軍奮闘」によってこれほどの内容を開発してきた事実は評価に値すると考える。今後、この3名の実践者の発表に対し、多くの学会員がクリティカルな批判を加えていただくことで輝きを増していくものと考えている。

しかし、今回の課題研究Ⅱで以下のような問題提起もなされたのではないだろうか。

- ①指導者（教師）が新聞そのものを正しく理解することの重要性
- ②新聞記事などを学習材として認識する指導者自身の感性をみがくことの大切さ
- ③新聞を薬と捉えれば副作用が起きないように配慮の必要性（子供たちに与える影響の大きさゆえに）
- ④また指導者そのものの問題として、今後この NIE 活動に魅力を感じてくれる中堅一若手教員の養成も急を要す課題
(コーディネータ 野津孝明)

◎ 自由研究発表

第1会場

第一会場では下記 1-3 の発表が行われた。その概要は以下の通りである。

1. 「リテラシーを育成する NIE 学習論の教育的効果に関する研究- 連載記事を用いた社会科授業の実践の分析を通して-」小原友行（広島大学）、川口広美（広島県広島市立井口台中学校／広島大学大学院）、尹 海燕、空 健太、竹内尊則、池 英蘭、真加部三智也、三浦寛之、愈 敬兒、若杉厚至（広島大学大学院）

本発表は、社会科で育成すべきリテラシーを「社会的事象や社会問題を読み解く力」と定義し、その育成過程を「社会的事象を理解する」「社会的事象について読み解く」「社会的事象についての記者・新聞社の価値観を読み解く」「社会的事象についての自己の意見を主張する」という4段階とした上で、「連載記事」を学習材に、それらに基づく中学校の選択社会を対象とした単元「連載記事から医療現場の問題を読み解こう！」を開発し、実践結果の分析からその教育的効果を実証的に明らかにしようとするものであった。

2. 「社会科リテラシーを育成する NIE 学習の開発」迫 有香（広島県廿日市市立大野中学校）、古谷修一（広島県広島市立鈴張小学校）、大庭玄一郎（広島県呉市立昭和北中学校）、武知秀樹（広島県立広島観音高等学校）

本発表は、高度情報化社会を生きる力として社会科で育成する力を「社会的事象や問題の背景を読み解く力＝社会科リテラシー」と定義し、その育成をめざす授業を4人の共同研究者がそれぞれの学校段階に応じて開発し、その実践報告を行うものであった。とりわけ中学校の公民的分野を対象とした単元「金融についてのニュースを読み解こう」を中心に報告が行われ、「風刺画」を素材に中学生が金融のしくみを学んでいく過程が詳細に報告された。

3. 「新聞を活用したメディアリテラシーの育成- 高校『現代社会』の場合-」森原 豊（広島県立三原高等学校）

本発表は、「現代社会」（高校1年対象）において実践している「5分間スピーチ」「記事をもとにした討論」「切り抜きテーマ学習」「情報の発信」などの取り組みについて実践報告を行うことを通して、情報の「読み取り」と「読み解き」の力をどのようにして育成していくのかについて、報告者自身の経験を踏まえた主張を展開するものであった。第一会場は、当初予定されていた司会者のお一人が病欠、急遽、代理の司会者が立てられるなどのハプニングに見舞われたものの、上記の三つの発表を通して常時 20- 30 名のフロアー参加者があり、「なぜその実践における学習材が『新聞』でなければならないのか」といった点を主な論点に、質問応答も活発に行われ、非常に盛会であった。

(司会 角田将士・阿部哲久)

第2会場

1. 「生涯学び続ける力を育てる—新聞による学びを通して—」河村 宏子（山口市阿知須中学校）

川村氏は、「新聞の中から取りだした情報を、自らの生活や感覚、心情と照らし合わせながら考えさせる」ことを重視し、「スクラップノート」「ウェビング」等の工夫や「意見交換場面」の設定などにより指導を展開した。

「スクラップノート」では、子どもの生き方にかかわる一つの視点・テーマから新聞をスクラップするという指導を行った。特に子どもたちの生き方と新聞とを積極的にかかわらせようとしていた。質疑過程で出た課題・要望として、新聞を「自らの生活や感覚」と「照らし合わせ」ためのより具体的な観点・手立てを今後解明し指導に生かして欲しいということがあった。

2. 「NIEでPIISA型読解力を高める—国語科における年間カリキュラムづくりと読解力テストを通して見えてきたもの—」神崎 友子（京都教育大学附属桃山中学校）

神崎氏は、NIEが「PIISA型読解力」向上に有効であるという仮説にもとづいて「5W1H」の指導、新聞の「読み比べ」の指導を展開した。その上で「PIISAの『読解力リテラシー』の観点に合致したテスト」を実施した。

「赤ちゃんポスト」等の様々な教材開発しながら新聞の「読み比べ」指導を行い、無答率を大きく減らすことに成功している。質疑過程で出てきた課題・要望として、「熟考・評価」の力にかかわって新聞を批判的に読み比べる力を身につけさせるための指導の解明も行って欲しいということがあった。

3. 「小学校におけるNIEカリキュラム構想—小学校国語科でのNIE実践の分析から—」臼井 淑子（横須賀市立鴨居小学校）

臼井氏は、NIEによって「情報化社会に生きる子どもたちのメディア・リテラシー威規制とコミュニケーション能力育成」を重視し、小学校6年間の「NIE評価基準表」を作成し実践した。

小学校において「メディアを批判的に読み解く」ことを重視し、様々な実践を展開している。また、「NIE評価基準表」は、同時にNIEの教科内容表ともなっており参考になる点が多い。質疑過程で出てきた課題・要望として、その「NIE評価基準表」をさらに具体化し国語科教育の教科内容の一つとして位置付くようなものにして欲しいということがあった。

（司会 阿部昇・杉川千草）

第3会場

自由研究発表第3会場では、急ぎよ発表者が2名になったが、内容のある発表をいただき、充実した分科会となった。

1本目は、高橋俊秀氏（茨城県教育庁高校教育課指導主事）が、「ポスターセッション（新技法）によるNIE実践」として、教員研修のプレゼンテーションの新技术をNIEに取り入れることで、効果的なNIE実践が可能ではないかといった新たな視点を提起した。この技法は、従来のポスターセッションを、タワー型の立体的な表現法に工夫改善したものであり、知的所有権立証登録をしたもので、実際の教員研修に取り入れているものである。今回は、これを使ったNIE学習への提案であった。会場からは、効果がある手法だが、NIEとしての効果測定が欲しいといった意見、また、新たな視点であり、今後の研修手法として参考になったとの意見があった。

2本目は、鎌田隆氏（清風高校）が、「NIEが育む学力と対話力」として、学校ぐるみの実践の中、モニタークラスでの実践と効果について紹介した。清風高校は、学校分掌にNIE部がある高校であり、NIEが日常的に学校に浸透している。その中で、NIEノートな

ど生徒の自主的な実践と教師からの支援の様子が紹介され、効果測定として、考査結果(成績)を用い、その向上を明らかにした。また、コミュニケーション能力の向上に資する結果もあわせて報告した。会場から、考査といった成績の中でどの力が高まったか、測定方法を検討して欲しいといった意見があり、NIEの効果測定の課題などを、今後の検討材料として、分科会を終了した。(司会 阪根健二・堤隆一郎)

第4会場

1 番目に「中学校国語科における NIE びらきの構想と実践- 新聞による学びの場をつくるために-」と題して植田恭子会員(大阪)が発表した。「NIE をどのようにひらいていくか」について、日本新聞教育文化財団が著した『NIE ガイドブック中学校国語編』の項目を紹介しつつ、「NIE びらきの単元：情報との対話」の実践を紹介した。他方で国語科の年間指導計画の中に組み込まれたかたちでの実践についても述べた。質疑では、「生徒にスクラップをどのようにさせているか」「もし新聞を使わないとしたら、どのような実践になるか。新聞はいかなる意味でベストなものと言えるか」などの質問があった。司会からは、集中型の NIE 実践と年間計画に組み入れられた実践とを比べる良い機会を得た思いであること。今後、こうした視点をより自覚的に適用して、いつ、どのように展開すれば、NIE が一層子どもたちに身近なものになるかを解明いただきたいと述べた。

2 番目には、『読解力』の育成に生かす NIE—指導の改善のための『指導の 7 つのねらい』から—」と題して、橋励会員(横浜)が発表した。その内容は、2 年間の NIE 実践校指定を受ける中、今日話題となっている PISA 型「読解力」を身に付けさせることをねらって「新聞記事の内容をもとにテーマを変えて書く」「グラフから読み取ったことを説明して書く」「同一の事件について複数の新聞を比較して読む」実践の報告であった。生徒たちが書いた資料が提示され、発表は分かり易かった。質疑では、「中学校 1 年生の白うさぎの話で内容の読み取りとともに、昔の人が考えた理想の人、私たちが考える理想の人などと読み深めていけば、読解力は身に付く。なぜ、今、PISA 型読解力などと言うのか」といった質問があった。この質問により、改めて、授業の質を上げる取組と新聞活用とが深く関連付けられて議論される必要性が喚起性されたように思われる。

3 番目には、「人を読む—新聞記事を使った読む・書く・活動の授業—」と題して、役重陽一会員(岡山)が発表した。中高一貫の学校で 70 分を 1 コマとした授業で新聞を使っているという。共鳴する力、批評・批判する力、自分の価値判断に照らし合わせて捉え直す力の 3 点から「記事を読む力」をとらえ、新聞記事の重要かつ気になる言葉をウエビングのかたちでメモさせ、それをもとに疑問や質問を列挙させている。さらに添削の手を入れて作文を書かせている。授業の板書や発問なども示され、授業に組み込まれた新聞活用の様子がよく知られた。1 つの内容に絞り 400 字限定で書かせた生徒の作文には、「記事を読む力」の確かな成長が現れていた。司会からは、得られた生徒作文に「記事共鳴型」「自己変革型」などの分類をして、NIE 実践の理論化をお願いした。(司会 寺尾慎一・八松泰子)

日本NIE学会 第4回総会報告

11 月 17 日に開催された第 4 回総会において、以下の議案の審議と報告が行なわれました。

1. 平成18年度決算
2. 平成19年度事業計画および予算
3. 第2期会長・理事・常任理事および監事
4. 第5回学会開催地
5. その他（財団との共同研究について。『NIEハンドブック』の出版企画案について）

1. 平成18年度収支報告（平成18年4月1日～19年3月31日）

項目	借方			貸方	
	予算案	摘要	金額(円)	摘要	金額(円)
会議費	300,000	常任理事会(9/10)お茶代	2,343	(収入の部)	
		常任理事会(9/10)交通費補助	111,000	・平成17年度より	1,568,580
		常任理事会(3/17)お茶代	1,764	繰越金	
		常任理事会(3/17)交通費補助	123,000	・会費	
		小計	238,107	法人会員	
会報 (3回分)	70,000	第3号 会報印刷代	24,550	1社×@50,000円	50,000
		第4号 会報印刷代	45,360	(17年度	
		第5号 会報印刷代	24,550	分)	950,000
		小計	94,460	19社×@50,000円	
会誌	1,000,000	創刊号(600部)印刷代	420,000	(18年度	49,685
		小計	420,000	分)	
通信・連絡 費	400,000	宅急便他運賃料金(ヤマト運輸)	187,082	1社×@49,685円	
		郵送料	6,640	(18年度	20,000
		小計	193,722	分)	
第3回大会 運営補助費	150,000	第3回大会総会費補助	150,000	会員会費(一般)	1,395,000
		小計	150,000	4人×@5,000円	
各種委員会 費	220,000	運営委員会費	0	(17年度	4,580
		企画委員会費	40,000	分)	
		研究委員会費	40,000	279人×@5,000円	4,895
		機関誌発行委員会費	49,140	(18年度	
		小計	129,140	分)	7,000
研究調査費	200,000	研究調査費	200,000	1人×@4,580円	
		小計	200,000	(18年度	25,000
事務局経費	380,000	アルバイト代	120,000	分)	
		振込手数料	1,590	1人×@4,895円	5,000
		事務用品	9,635	(18年度	
		封筒印刷代	15,540	分)	
		第2回総会資料印刷代	16,800	1人×@7,000円	28,000
		小計	163,565	(18年度	
予備費	1,128,580		0	分)	4,000
		支出合計	1,588,994	5人×@5,000円	
				(19年度	65,000

		平成19年度へ繰越金	2,588,170	分)	
				1人×@5,000円	424
				(20年度分)	
				会員会費(学生)	
				14人×@2,000円	
				(18年度分)	
				2人×@2,000円	
				(19年度分)	
				・書籍売り上げ	
				(65冊×@1,000円)	
				・銀行利息	
合計	3,848,580	合計	4,177,164	合計	4,177,164

2. 平成19年度事業計画および予算

平成19年度事業計画

平成19年 6月	学会報第6号発行
7月27日	財団との共同研究プロジェクト設置
9月 2日	選挙管理委員会(理事選挙開票)
9月 9日	常任理事会(日本新聞協会大阪事務所)
10月	学会報第7号発行(第4回大会2次案内)
11月17日~18日	第4回大会(総会、理事会)
12月	学会報第8号発行(第4回大会の報告)
平成20年 3月	学会誌第2号発行、常任理事会

平成19年度予算

収入の部

会員会費	1,400,000	(350人×0.8×@5,000)
法人会員会費	840,000	(21社×0.8×@50,000)
平成18年度繰越金	2,588,170	
合計	4,828,170	

支出の部

会議費	350,000	
会報(3回分)	150,000	(6、7、8号)
会誌	450,000	(2号)
通信・連絡費	300,000	
大会運営補助費	150,000	

各種委員会	220,000	
理事選挙費	250,000	
研究調査費	200,000	
出版準備金	1,000,000	(NIE ハンドブック)
共同研究プロジェクト	500,000	(財団との共同研究)
事務局経費	300,000	
予備費	958,170	
合 計	4,828,170	

3. 第2期会長・理事・常任理事および監事について

07年11月17日に開催された第4回理事会及び総会において、下記の方々が会長・理事・監事並びに常任理事が選出されました。(敬称略)

会長 影山清四郎(東京福祉大学)

理事 阿部 昇(秋田大学)、有馬毅一郎(島根県立女子短大)、有馬進一(藤沢市立大庭中)、生田孝士(新潟大学)、板垣雅夫(東京私学教育研究所)、植田恭子(大阪市立昭和中)、臼井淑子(横須賀市立鴨居小)、内野哲也(朝日新聞東京本社)、枝元一三(大阪推進協)、小田迪夫(元大阪教育大学)、門脇厚司(筑波学院大学)、木村博一(広島大学)、岸尾祐二(聖心女子学院初等科)、小原友行(広島大学)、阪根健二(香川大学)、重松克也(横浜国立大学)、高辻清敏(北海道推進協)、高木まさき(横浜国立大学)、寺尾慎一(福岡教育大学)、豊嶋啓司(福岡教育大学)、野津孝明(松江市教育センター)、平石隆敏(京都教育大学)、福田 徹(武庫川女子大学)、本杉宏志(都立町田高校)、森田英嗣(大阪教育大学)、門奈直樹(立教大学)、谷田部玲生(国立教育政策研究所)、柳沢伸司(立命館大学)、吉澤正一(新聞教育文化財団)

監事 岡本利明(大阪府教育センター)、高田喜久司(上越教育大学)

常任理事 板垣雅夫、植田恭子、内野哲也、枝元一三、小原友行、重松克也、阪根健二、高木まさき、寺尾慎一、野津孝明、平石隆敏、森田英嗣、谷田部玲生、柳沢伸司、吉澤正一

※任期は、平成21年度の総会まで。任期終了までに会員による選挙を行い、次期役員・委員長を選出する。

● また総会後に決定された、第二期の各委員会の委員長と委員は下記の通りです。

企画委員会 委員長 谷田部玲生(国立教育政策研究所)

委員 高木まさき(横浜国立大学)、重松克也(横浜国立大学)、本杉宏志(東京都立町田高等学校)、有馬進一(藤沢市立大庭中学校)、岸尾祐二(聖心女子学院初等科)

研究委員会 委員長 小原友行(広島大学大学院)

委員 柳沢伸司(立命館大学)、阪根健二(香川大学)、木村博一(広島大学大学院)、朝倉淳(広島大学大学院)、臼井淑子(横須賀市立鴨井小学校)、植田恭子(大阪市立昭和中学校)、野津孝明(島根県立松江教育センター)

紀要編集委員会 委員長 寺尾慎一(福岡教育大学)

委員 祇園全禄(元・弘前大学)、豊嶋啓司(福岡教育大学)、小田泰司(福岡教育大学)、河野智文(福岡教育大学)

運営委員会 委員長 枝元一三（大阪NIE推進協議会）

委員 平石隆敏（京都教育大学）、森田英嗣（大阪教育大学）、和泉敬子（和歌山大学）、中西一彦（大阪教育大学附属天王寺中学校）、角森久美子（大阪市立西九条小学校）

4. 第5回学会開催地について

来年の第5回大会の開催地は福岡教育大学（福岡県宗像市）に決定しました。

11月中旬頃の開催を予定していますが、詳細については、あらためて会報でお伝えさせていただきます

5. その他

（1）日本NIE学会と日本新聞教育文化財団との共同研究について

1 経過

本年5月に日本新聞教育文化財団NIE部長から、学会と財団の共同研究としてNIEの効果測定を実施できないかとの申し入れがありました。

学会側は、会長・運営委員長・研究委員長と相談し、積極的に受けとめ財団の吉沢部長と6月16日に共同研究について意見交換、さらに7月27日に、阿部昇、小原友行、阪根健二、谷田部玲生、影山清四郎、枝元一三、吉沢正一、朝日・毎日・読売新聞各社のNIE担当者と研究についての打ち合わせを行い、以下の諸点を確認しました。

2 目的・組織

1) 目的：NIEの効果測定（仮題）

「PISA」型リテラシーや「読解力」の育成にはたす、NIEの役割・効果を明らかにする。

2) 研究の方法

①研究者とNIE実践者と共に、共通の実践プランと評価項目に基づき、実践を展開しつつ検証する（質的研究）

②財団が実施しているNIE効果測定の質問項目の検討（計量的検討）

3) 組織

学会の中にプロジェクトチームを設け、NIEアドバイザーと共に、東北・関東・近畿・中国四国、九州の各ブロックを単位に、実践研究を行う。

学会の責任者として研究委員長があたる。その他のメンバーは別紙参照ください。

4) 予算

学会側は、毎年、50万円（3年間を予定）。財団は未定。

3 今後の予定

学会終了後、18日にアドバイザーの先生を含め、第一会プロジェクトを開催。研究の目的・方法・組織等について検討する予定。

その後、3月末、夏のNIE全国大会、秋の学会開催時に研究を重ねる。

08年3月 実践と評価の視点の共通確認

08年 実践とその分析、及び中間報告

09年 実践と分析、最終報告作り

10年3月 報告書の発表

（会長 影山清四郎）

地区支部の活動

◎ 四国地区

11月10日、日本NIE学会四国地区集会在、高松市中野町のルポール讃岐で開催された。香川県内のほか、愛媛、徳島、山口県の小中学校教諭ら約30人が参加した。

今回は、香川大学大学生による四国4県のNIE実践の傾向分析の研究発表(特別発表)、産経新聞支局長をコメンテーターとして、実践校でのNIE実践を個々に検証する(検証型実践発表)など、新たな集会形式を取り入れた。この中で、香川大教育学部の学生四人は、山本木ノ実准教授の指導の下、1999—2004年度にNIEに取り組んだ四国四県の小中高校135校の実践事例を分析した結果を報告。今後の課題として、▽テーマを決めた継続的な実践が必要▽教科の目的達成の手段で終わらず、児童生徒の生活に結びつく活動につなげる▽NIEが教諭に知れ渡るように広く周知して発展させる一などを挙げた。また、実践校などでは、英語の授業で英字新聞を活用したり、生徒会便りを新聞の体裁にする試みなどを紹介したりするなど、活発な意見交換がなされた。予定時間を超えた充実した集会となった。
(香川大学 阪根健二)

◎ 近畿地区

12月15日、大阪教育大学天王寺キャンパスにおいて、近畿地区の会員約30人の参加のもと第2回の近畿支部大会が開催された。

「新しい学習指導要領の中でNIEが果たせる役割」と題したシンポジウムでは、指導要領改訂がめざそうとする方向、またその背景にあるOECDの学力観についての報告が行なわれ、NIEの果たすべき役割をめぐって活発な議論が行なわれた。つづく二本の発表「NIEが育む学力と対話力」「新聞を活用したディベート授業」は、新聞記事を題材にしたディベートなどによる言語の活用力の育成をはかる実践の報告で、まさに今後NIEに求められる内容であるとともに、いずれも効果の測定にまで踏み込んだ内容である点が注目された。

近畿支部では、この会を会員の自由な意見交換や情報交換の場としたいと考えており、今後さらに開催時期や内容・テーマなども含めて充実をはかっていきたい。

(京都教育大学 平石隆敏)

会報ニュース

1. 投稿・執筆要領の一部改正について

2007年11月17日、広島大学において開催された理事会におきまして、『日本NIE学会誌』の「投稿・執筆要領」が一部改正が承認されましたのでお知らせいたします。

より多くの会員に投稿の機会を提供したいということが改正の趣旨です。

旧：「1. 論文は、未公開のものに限る。ただし、口頭発表、プリントの場合はこの限りではない。」

新：「1. 論文は、未公開のものに限る。ただし、口頭発表、プリントの場合はこの限りではない。応募する論文は、同一タイトルの場合、2回まで連続投稿を認める。」

2. 新教育課程について日本NIE学会からの要望書

中央教育審議会教育課程部会の「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」（11月7日）に対するパブリックコメントとして、NIE学会より下記のような意見を提出いたしましたのでお知らせいたします。（一部略）

日本NIE学会
会長 影山清四郎

先に発表された「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」を拝見して、複雑に錯綜する教育問題に対して、あらたな方向を打ち出されたことに敬意を表します。

提案された教育課程を教育現場において実現するために、实际的・効果的な教育方法として新聞を活用することを積極的に教育課程編成の原理として盛り込むことを要望いたします。

1 新聞をあらゆる教科・領域において積極的に活用することを推奨していただきたい

新聞は、「社会の縮図」であり、活字文化を体現化した「生きた教科書」でもあります。複数の新聞を、全紙面を学習材として活用することは、読む力・考える力・話し合う力を育て、世の中の出来事に関心を持ち、民主主義社会の担い手として必要な知識・関心・態度を育てます。

「審議のまとめ」で示された6項目の課題（22頁）や思考力・判断力・表現力等を育むための学習活動の6つの分類（25頁）、そして社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改

善すべき事項（64～69頁）などは、新聞を積極的に活用することによって、無理なく・自然に実現できると考えます。したがって、あらゆる学校段階で、あらゆる教科・領域において新聞を活用する必要性と重要性に言及していただきたいと存じます。

2 学校図書館で複数の新聞が閲覧できるよう財政的支援を含め推奨していただきたい。

「学校図書館の活用」において、「辞書・新聞の活用」（54頁）に触れられていますが、昨今の学校予算の削減の中で新聞を購読することもままならない状況にあります。

そこで、メディアリテラシーの育成のためにも、複数の新聞を閲覧する重要性とそれを裏付ける財政的保障の必要性を盛り込んでいただきたい。

3. 事務局から

1) 会員名簿の変更・追加

【 変更 】

渥美 勝朗

（電話番号）052-221-1304

【 追加 】

関 博至

（所属）毎日新聞東京本社

(所属先住所) 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1丁目1-1

(所属先電話) 03-3212-3359

(E-Mail) seki@mbx.mainichi.co.jp

樋口 克次

(所属) 大阪経済大学

(自宅住所) 〒612-0829 京都市伏見区深草谷口町78-6

(E-Mail) guchi@osaka-ue.ac.jp

山本 木ノ実

(所属) 香川大学教育学部

(所属先住所) 〒760-8255 香川県高松市幸町1-1

(E-Mail) k-yamamoto@ed.kagawa-u.ac.jp

田口 紘子

(所属) 広島大学大学院教育学研究科

(自宅住所) 〒739-0041 広島県東広島市西条町寺家2580-2

フレグランス中村B-205

(E-Mail) h-taguchi10-23@hiroshima-u.ac.jp

2) 学会費納入のお願い

2007年度学会費未納の方は、同封の振込用紙で納入をお願い申し上げます。